

ぐんま若者サポートステーションでは、若者たち一人ひとりの状況に応じて、包括的・継続的に職業的自立を応援しています。
また、若者が社会と関わるためのリソースをご家族と見つける家族サポートも実施しています。

若者無業者(ニート)の親が先行きの見えない雇用情勢の中で焦りを募らせている。当事者である子どもにも代わって支援団体のセミナーなどに積極的に足を運ぶ人が増えてきた。親自身が子どもとの接し方を変える必要があるなど、自立に向けて克服すべき課題は多い。

「欠点は十分に目を向けず、子どもの良いところ探しをしましよ」。群馬県

のニートの自立支援拠点、ぐんま若者サポートステーション(サポステ、前橋市)で三月末に開かれた保護者向けセミナー。カウンセラーが親子のかわり方を説明すると、集まった五人の母親はうなずきながら静かに耳を傾けた。

参加者の一人、群馬県富岡市在住の主婦(52)の息子(23)は高校卒業後、東京都の大学に入学。だが人間関係の問題などから二年で中退、その後入学した専門学校も一年で辞めた。アルバイトもしたが二週間に

続かず、無業の状態は二年近くになるという。「雇用の受け皿がどんどんなくなっている」と焦りを感じ、四月からは横浜市

の民間施設に約三十万円を払って三カ月間の職業訓練コースを申し込んだ。「息子の同世代は就職する時期なのには何年かかかるか分からない。氣力、経済力とも限界です」。思いを打ち明けると、講師は表情と声に

は疲れがにじみ出る。サポステを運営する特定非営利活動法人(NPO法人)キャリア倶楽部(群馬県高崎市)の太田和雄理事

長は「景気悪化で親の危機感が増している」と指摘す

る。二〇〇九年一・三月の保護者からの要請相談件数は六十四件で前年同期と比べ二十件ほど多い。

「支援を求めめる人がこんなにいるのか。東京都や埼玉県などでニート支援に取り組むNPO法人一斉で

上げ、ネット(東京都立川市の工藤啓理理事長は親向け講演会の反響に驚きを隠せない。三月上旬に開いた講演会は百四十人の定員に

対して四百人規模の問い合わせがあったという。年間を通じて相談者の三人に一人は親。セミナーなどの申込人数は前年比一一割増えている。

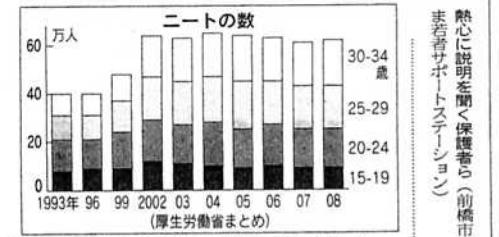
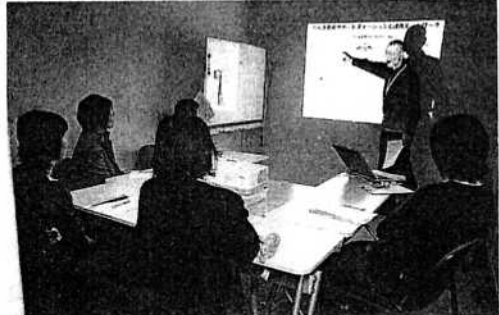
不況でニート自立の敷し

さは増すばかりで親の焦りも募る。全国の有効求人倍

ニートの親に焦り

雇用情勢が悪化 自立講座に続々

「不況でニート自立の敷しは増すばかりで親の焦りも募る。全国の有効求人倍率は前年比一一割増えている。ニートは、やる気がない」と批判されることがあるが、その原因は職場や学校でのいじめから家庭内暴力、発達障害まで十人十色。一方、母親は「子育てがままらなかった」と責任を一人で抱え込み、誰にも相談できず悩んでいる。ニートは、やる気がない」と批判されることがあるが、その原因は職場や学校でのいじめから家庭内暴力、発達障害まで十人十色。一方、母親は「子育てがままらなかった」と責任を一人で抱え込み、誰にも相談できず悩んでいる。



厚生労働省によると、二〇〇八年のニートは全国で約六十四万人。この数年、六十万人超で横ばいが続く。キャリア形成支援は「景気悪化の影響で膨らんでいくのでは」とみている。

支援拠点全国92カ所
就職など進路が決まるのは四人に一人程度だ。ほとんどのニートは履歴書に空白期間がある。親は「できれば正社員」と望むが、なかなか難しい状況のよう

我が子の将来は／衝突恐れず会話を

ず思い詰めてしまふ場合が多い。各地の支援所はニートの原因追及をやめるなど親の気持ちの切り替えを促すことから始める。

しかしカウンセラーが面談を繰り返して親が元気になる。親自身が子どもと会話するなどの行動に移さなければ当事者の自立には効果がない。「パンフレットを渡すだけではだめで、子ども部屋にパソコンを置けば引きもりにつながらず、「育上げ」ネットでは口を酸っぱくして親に訴えるが、二割は衝突を恐れて行動に踏み切れない」という。

外の力を借りて
筑波大学が一・三月に実施した支援プログラムに参加した五十代の母親は、二十代の無業の息子と年に一回程度しか真剣な会話ができなかった。だが同じプログラムに参加する仲間が報告したいという気持ちが背中を押し、「二カ月に一回くらい進路について話し合おう」と切り出すことができたという。担当した臨床心理士は「親子関係の改善は、親が家庭の外で人間関係を築き、親子の膠着(こうちやく)状態を打ち破る力を得ることが必要」と指摘する。

良好な関係を築くには「いつまで家にいるんだ」などと子どもを追い回める言動は必ずしも有効ではない。例えば「はま若者サポートステーション(横浜市)で相談を受けた六十代の主婦のケース。三十代の息子は十五年間引きこもり状況だった。サポステの助けで「心配はしているがすぐに動けは変わらないよ」となると圧力を与えない会話の心がけが結果、〇八年に息子は警備員の短期アルバイトに就くことができたという。

雇用問題に詳しい東京大学の玄田有史教授は「支援団体はそれぞれ得意分野があるため、一方所でダメでもあきらめず数カ所に相談に行ってみよう。最初は週二日勤務のアルバイトでもいい。親は焦らず子どもを見守り続けることが大切」と主張する。